

前島信也

『敬西房信瑞の研究』

—鎌倉浄土教典籍論— (法藏館、二〇二二)
上杉 智英

本書は国際仏教学大学院大学日本古写経研究所の研究者である前島信也氏が、二〇一八年度に大正大学大学院仏教学研究科へ提出された博士論文を加筆・修正し、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)を受けて上梓されたものである。構成は以下の通り。

口絵
序
第一篇 信瑞とその著作
第一章 信瑞に関する伝承
第二章 著作に関する伝承
第二篇 信瑞著作の書誌学的整理
第一章 『浄土三部経音義集』
第二章 『広疑瑞決集』
第三篇 信瑞著作に見る教学背景
第一章 『浄土三部経音義集』—信瑞の宋代仏教文化の受容—
第二章 『広疑瑞決集』—説話文学の受容—
第四篇 信瑞の思想—『広疑瑞決集』の思想とその特徴—
第一章 諏訪信仰をめぐる
第二章 浄土思想

結
【資料】
【付録】

本書は、法然房源空の上足である長楽寺隆寛・法蓮房信空の弟子、敬西房信瑞(？—一二七九)を研究対象とし、その人物像、及び教学背景を明らかにすることを目的としたものである。

現在では設計図面に多用されたことより転じた「計画」「将来設計」を意味する言葉としてしか口の端に上ることはなくなった。本書はその失われた技術によって伝存した本文の重要性を知恩寺本との比較によって明らかにし、翻刻を付録している。

以上、「第二篇 信瑞著作の書誌学的整理」は新知見に富み、日本古写経研究所研究員として日夜、写本の調査・研究に勤しむ前島氏の面目躍如たるものと言えよう。

なお、彰考館本については「潜意閣蔵書記」の印記より徳川斉昭(一八〇〇—六〇)の蔵書であったことに言及されているが、国学者の小山田与清(一七八三—一八四七)が弘化三年(一八四六)に徳川斉昭へ蔵書を献納した際の目録と考えられる早稲田大学図書館蔵「松屋蔵書目録」には「広疑瑞決集 一」との記載が二箇所に見え(第五号一四丁表・第七十四号四二丁表)、その来歴が伺えることを附言しておく。

ところで、本書には博士論文になかった副題「鎌倉浄土教典籍論」が追加されているが、はたして信瑞の著作を以て「鎌倉浄土教典籍論」を語ることは妥当であろうか。これは知名度の低い信瑞の属性「鎌倉(時代)」「浄土教」を明示し、購買層を広げようという単なる販売上の方便であろうか。これは本書を手にした際の率直な疑問であった。さて、もとより一〇〇〇頁を超える本書を十全に評するだけの紙幅(及び能力)はなく、ここでは特筆すべき成果の一つに言及したい。「第三篇第一章『浄土三部経音義集』—信瑞の宋代仏教文化の受容—」では、『浄土三部経音義集』の序跋により「編纂の動機は、信瑞在世当時に経文の正確な文字とその理解が失われていることに対する危機感」(二二二頁)とし、その撰述に宋版(思溪版)大蔵経を依用していることを実証した上で、「信瑞は宋代仏教を積極的に受容していた」「それを提供する「場」を担ったのが泉涌寺であったと考えられる」(二六一頁)と述べるが、この両者「信瑞の危機感」と「宋代仏教の受容」は無関係ではない。従来の読誦音と異なる宋音、既存の本文と異

のである。通常、特定の人物の思想とその背景を明らかにするには、当人の著作を一次資料として考察するのが定石である。現存する信瑞の著作としては、以下の四点が知られている。

- ①『浄土三部経音義集』全四巻
- ②『泉涌寺不可棄法師伝』全一卷
- ③『広疑瑞決集』全五巻
- ④『明義進行集』巻第二—三

しかし、従来これらを包括した信瑞像は描き出されていない。それは、①『浄土三部経』の音義書、②入宋僧で北京律の祖とされる俊苒の伝記、③諏訪信仰者である上原教広の疑問に答える問答集、④他宗から法然の教えに帰依した八人の言行録、と個々の著作の性格があまりにも異なるためと推測される。それぞれは字音研究、俊苒研究、諏訪信仰研究等の資料として個別に研究対象とされてはきたが、それらを総括して信瑞像が明らかにされることはなく、信瑞研究は群言評象の様相を呈していた。

このような問題意識より本書は、取り分け基礎研究が脆弱な「浄土三部経音義集」および「広疑瑞決集」の基礎研究、すなわち書誌学的研究と引用典籍の精査を行うことで、信瑞の著作活動の意義を総体的に捉え直し、信瑞の人物像および教学背景を明らかにする(六頁)ものである。



なる宋版。南宋文化の流入が信瑞にアイデンティティクラシスをもたらしたことは想像に難くない。既存のテキストと新たに宋より伝来したテキストの相違による危機感。それは序文の「音謬らば功浅く、語誤らば義失う」(一九五頁)に吐露されている。「浄土三部経音義集」の撰述は、南宋文化の流入による従来の伝承読誦音・本文の揺らぎが、鎌倉時代の僧伽の直面した一大問題であったことを浮き彫りにしており、この点において新たに追加された副題「鎌倉浄土教典籍論」は決して商業上の謂いではなく、実に適切に本書の功績を言明したのと言えよう。前述の勘繰りを恥じる。この問題は浄土教に限ったものではなく、同時代資料である嘉祿三年(一二二七)に高山寺の義林房喜海(一一七八—一二五二)によって編纂された『新訳華嚴経音義』の成立を勘案することにより、さらに「鎌倉仏教典籍論」として昇華されるものである。本書は鎌倉時代の一僧である信瑞の著作の読解を通じて信瑞像を描き出すが、それが信瑞一人に留まらず広く鎌倉仏教の直面した問題までを明らかにしている点は特筆に値する。

なお、『浄土三部経音義集』の序跋について附言すれば、序文「自非略其差舛集其正義、彰徳大範難矣」(一九五頁)は漫句ではない。「重疑」は「重ねてなぞらえるに」(二〇八頁)ではなく、上の句に付き「逾病」と対をなす。跋文に「典故を有する表現は確認できないが」(二〇三頁)とするが、「華紐」(四分律)、「管見」(莊子)、「膠柱」(史記)、「脂車」(漢晋春秋)、「反唇」(史記)等(二〇二頁)がみられる。

これらにより本書の結論、並びに功績は何ら揺らぐものではない。ただし、伝来した本文を正しく読むところが信瑞を理解するという行為に他ならない。「付録」「大正大学附属図書館蔵『広疑瑞決集』翻刻」には「中弓」の語注として「意味取れず。次の『法師原』に対応する語句か」(七四二頁)とする。これは指摘の通りで「法師原」に対応する「中方」の誤写と考えられ、本来、前行の「行者」「人力」に附されたものであろう。中世叡山の階級が使用される点に信瑞の教学背景が垣間見られよう。

本書の研究視座は「信瑞の著作を信瑞の著作として読む」という当然のものであるが、それが従来なされてこなかったことは、信瑞の多彩な著作を総合的に読解することの困難さを物語るものと言えよう。また、その手法は「諸本を収集・整理し校訂して読む」「序跋の駢儷文は駢儷文として読む」といった至極真つ当なものである。取り分け前者は古典を読む上で必須の工程であるが、その実直な文献学的手法は「第二篇 信瑞著作の書誌学的整理」において遺憾なく発揮されている。

『浄土三部経音義集』に関しては写本十七点を収集するが、前島氏の搜索は国内に留まらず、清末・中華民国初期の学者で『日本訪書志』『古逸叢書』の編者として著名な楊守敬(一八三九—一九一五)によって購入、または書写され持ち帰られた台湾国家図書館蔵本、中国国家図書館蔵本の五点も実見している。それらの関係、並びに資料価値を明らかにした上で、現行の活字本三本を含む計二十本の本文系統を整理し、現存諸本の関係を図示している(二二五頁)。

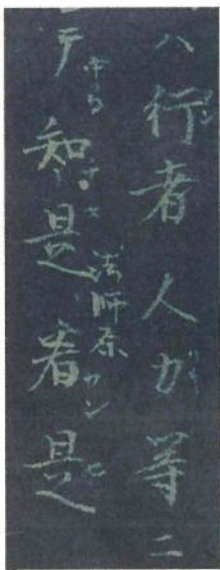
『広疑瑞決集』に関しては三点の写本の他、原本は焼失しマイクロフィルムとして伝存する彰考館本、大正大学附属図書館蔵の青焼複写本の五点を収集する。書写典書のない知恩寺本の書写年代を原装幀と文字・訓点より丹念に推定する過程は、古写本に對した際に何れの点に着目し判断すべきかが具体的に示されており、一つのモデルケースとして文献学に興味を有する初学者には是非一読いただきたい。

また、完本でありながらその来歴・本文系統が不明な大正大学附属図書館蔵の青焼複写本についての考察は複写技術の歴史にも及び、青焼本が実際には青焼(ジャン式複写)ではなく、青写真(サイアノ式複写)であることを論証している。この下りは一見、冗長に感じるかもしれないが、複写の原本が誰によって書写されたのかを考察する上で複写時期の特定は前提として重要である。青写真が用いられていることより青焼が普及する一九五〇年代以前と考えられ、前島氏は原本の書写者を伊藤祐晃(一八七三—一九三〇)と推測されている。青焼の普及により「青写真」は衰退し、

この他、本書では信瑞加本より移点したとする奥書を有する東洋文庫岩崎文庫蔵の版本「選択集」や、大谷大学所蔵「言泉集」の末尾に見える信瑞が編纂したとされる願文集「勸策要林」の存在にも言及されている。これらの検討を通じ、さらに信瑞の知られざる一面が明らかにされることを期待するのは望外であろうか。

本書は『浄土三部経音義集』序文末の「冀くは見る者添削して洪範の至蹟を形せ」(二〇九頁)という信瑞の言葉を受けとめてその著作と向き合い、群言評象であった信瑞研究に光明をもたらすものである。また、本書には口絵カラー図版八点と、「資料」として『浄土三部経音義集』諸本異同比較表、採録語句・出典一覧、『広疑瑞決集』引用説話 原典比較表、「付録」として知恩寺所蔵『広疑瑞決集』巻第四影印・翻刻、大正大学附属図書館蔵『広疑瑞決集』翻刻、知恩寺所蔵『広疑瑞決集』声点一覧、『広疑瑞決集』振仮名一覧を掲載する。これらは信瑞研究のみならず、国文学・国語学においても有益な資料を提供するものであり、広く諸氏に活用されることを期待する。

【参考文献】
尾上寛伸「中世期比叡山の階級制度—「中方」及び「他」を中心として—」、『印度学仏教学研究』第十一巻第二号、一九六三年
松本智子「早稲田大学図書館蔵『松屋蔵書目録』翻刻」、『早稲田大学図書館紀要』第五七号、二〇一〇年
佐々木勇「新訳『大方廣佛華嚴經』音読史における喜海撰『新訳華嚴經音義』の音注」、『調点語と調点資料』第一三六号、二〇一六年



正大青焼本三五丁裏(部分)